冴子

Saeko

松井健児



京都芸術大学出版局

目　次

晩秋の沼辺
晩鐘
美しきロスマリン
田島が原
記念祭
三渓園
インターハイ
クールベの女

今月から

インターハイ

馬術競技は各選手の成績の合計点争われる。
一人の持ち点を、一〇ないし一二個所の障害を完璧に定時間以内で飛越した時を二百点とし、減点法が採用されている。
馬事公苑にて、戦後最初のインターハイが行われた時、全く障害飛越の経験のない新一は、細身に弊衣破帽　草鞋履き　木の枝の鞭という出立で、これまた全く障害飛越の経験のない痩馬に騎乗して出場した。
客席は着飾った米国の軍人とその家族達で埋まっている。
ゲートを無事に通過、加速しながら第一障害へ、拍車と小枝の鞭。強烈な拒否！前につんのめりそうになる。
二度目のトライ。
「遂にやった！」、奇跡が起こった。
何と、身が宙に浮き馬の頭を超え、横棒を超えた。場内に爆笑が起こった。
新一は初めて自分の体勢を理解した。
ゆっくり立ち上がり、脱帽して一礼すると、毅然として　馬を引いて退場していった。

中学二年生になると、新一は　市街地を避け　季節ごとに変る田園風景を楽しみながら下校していた。

或る日、新しい馬場を見付けた。

そこに、初姫という若いひん馬がいた。栗毛で、品の良い美しい顔をしている。帰途必ず立ち寄って、顔を思いっ切り撫でてやると、長い鼻を強烈に中学二年生の顔に押し付けてくる。痛いのを我慢してお返しをしてやる。

或る日、馬丁の一人が言った。

「初姫が鳴き出し、前足で床を掻きはじめると、二、三分後に必ず君が現れる。金は要らないから、乗ってやってくれないか」。

学校では弓道部に所蔵している新一は、流鏑馬をやっている自分まで想像し始めた。

人口4万の文化都市は生垣の家が多く、早朝町で騎乗するのは快適であったが、戦争が始まると、初姫まで徴用されていった。

屈辱のインターハイから二年過ぎていた。馬場は手入れされた芝生と白砂で敷き詰められている。選手は長靴を履き、白い手袋をつけ、革の鞭を持っている。国際馬術クラブは皇居の自然林の中に豪奢な姿を見せている。

新一に当てがわれた馬は最近まで皇太子の愛馬であったと告げられた。

よく調教されているのが分かる。
先輩に暴れ馬ばかり与えられてきた新一にとって、安心して出場することが出来る。

初戦に残った八校間で、各校二人の選手の合計点により　勝敗を決めるのである。

快調に十二の障害をこなしていく。中には、苦手な水壕まである。乗馬して直ぐ、この馬は強制しない方が上手くいくことに気が付き、馬に追従したのが良かったのだ。林道に入った。勝負はこれからだ。スピードを上げなければ、減点になる。林道の散策を始めた馬は、騎手の催促を無視して、木洩れ陽を楽しみ始めた。一二障害は全てを飛越したが、タイムオーバーとなり、皇太子の御臨席の場に参加するチャンスは永遠に失われた。

クールベの女

新一は冴子の部屋に急いでいた。埼玉会館で行われた諏訪根自子のリサイタル以来 冴子の顔を見ていない。無性に会いたくなってきた。突然顔を見たら、驚き大喜びしてくれるだろう。そう思うだけで心が浮きたってくる。さっきまで空に掛かっていた新月は、異様に黒い雲に覆われはじめた。

農家の庭に入った。

冴子の部屋から灯りが見えない。留守なのか?冷たい風が一瞬心を横切った。ドアを叩こうとしたが、様子を見ることにして、窓の方に廻った。

窓に近づいた。人の気配がする。腰をかがめながら、柱と窓の僅かな隙間から中を覗いた。

横たわる二つの白い女体が目に飛び込んできた。二人の女があれもない姿で抱き合っているクールベの絵を見た時の心のどよめきが蘇ってきた。そのひとりは、こともあろうにそこにあるのは、新一が愛してやまない冴子の一糸まとわぬ姿なのだ。、新一は藝術至上主義に憧れている。できれば、画家になり、本当の美を追求してみたい。

男にとって女体はもっとも魅力のあるオブジェである。新一にとってはエロチック以上に神聖なテーマである。

影が映らないように気を使いながら身を引いた。心臓の鼓動を押さえつつ、もう一度覗いた時、身をお越し、両手を頭の後ろに組みながら、ただ可憐にむしろ哀れっぽく横たわる冴子に視線を送っている女を見た。

新一は、またしても躊躇し出した。飛び込むで、「止めろ、俺の女に手を出すな、などの低劣な言葉はふさわしくない。最初　怒りをおぼえたように、女は冴子を汚したのだろうか？犯したのはむしろ覗き見した男の俺ではないか？